

中国語を母語とする日本語学習者による擬音・擬態のオノマトペの 軽動詞付加と副詞としての使用の習得

馮亜静（名古屋大学大学院生）・玉岡賀津雄（名古屋大学）・楊艶萍（中南林業大学）

1. 研究目的

日本語を母語とする幼児において、オノマトペの統語習得プロセスは、軽動詞付加（以下、スル動詞）から副詞への「品詞転換」が起るといわれている（Nagumo, Imai, Kita, Haryu and Kajikawa, 2006; 佐治・今井, 2013; 鈴木, 2013）。日本人の幼児は日本語オノマトペをスル動詞（e.g., くしゃくしゃしている）として使用しているが、日本語を母語とする成人は日本語オノマトペを主に副詞（e.g., くしゃくしゃ丸めている）として使用する傾向がある。第 1 言語習得において幼児は周りの言語環境からのインプット（Toda, Fogel and Kawai, 1990）と音象徴への感受性によりオノマトペを容易に習得し（Asano, Imai, Kita, Kitajo, Okada and Thierry, 2015），そして「オノマトペ+する」で表現された概念・対象と一致させながら動作の言語化を実現し，さらにオノマトペと新しい一般動詞との組み合わせで一般動詞の習得を促進する流れがあるとされている（Imai, Kita, Nagumo and Okada, 2008; 鈴木, 2013）。この主張によれば，一般動詞の獲得により，オノマトペはスル動詞から副詞としての使用へと変わっていくことになる。その結果，オノマトペ（擬音語と擬態語）は副詞として一般動詞と共に使用されることが多くなる（Kakehi, 1983; 田守・スコウラップ, 1999）。

日本人の幼児には簡単に身につけられるといわれている日本語のオノマトペであるが，日本語を第 2 言語または外国語とする学習者には，非常に難しいといわれている（馮・玉岡, 2018a）。日本語教育のカリキュラムは，一般語彙と基本文法が主要であり，オノマトペはほとんど含まれていない（阿刀田・星野, 1989; 金, 1989）。その結果，第 2 言語習得の場合は，日本語を母語とする幼児のようなオノマトペから一般動詞への言語獲得プロセスに従わず，むしろ一般動詞の習得が逆に日本語オノマトペの意味理解を促進するとされている（馮・玉岡, 2018b）。したがって，第 1 言語としてのオノマトペ習得にみられたスル動詞から副詞への品詞転換のプロセスが第 2 言語習得では存在しないと予想される。

本研究では，第 2 言語習得において，日本語オノマトペの習得プロセスにはスル動詞から副詞への品詞転換が存在するかどうかを明らかにするために，中国語を母語とする日本語学習者を対象としてオノマトペの意味理解課題を課し，同一のオノマトペがスル動詞と副詞として使用される条件で，擬音語，擬態語の統語習得を検討する。同時に，文法テストを実施し，文法力がオノマトペの習得にどのように影響を及ぼすかを検討する。

2. 被験者

2018 年 9 月から 10 月までの期間に中国の華中地域にある大学でオノマトペ調査を実施した。調査対象は大学で日本語を主専攻とする中国人大学生 88 名（男性：21 名，女性：

67名)である。そのうち、大学の1年課程修了の2年生が4名、2年課程修了の3年生が37名、3年課程修了の4年生が49名であった。被験者の平均年齢は21歳2カ月、標準偏差は11カ月であった。最年少者は19歳1カ月、最年長者は23歳4カ月であった。全員、日本に留学経験のない日本語学習者であった。

2. 研究方法

オノマトペの意味理解課題では、擬音語と擬態語の各10語につき、副詞(「松田さんはにやにや笑っている」)とスル動詞(「吉田さんは近藤さんを見ながら、にやにやしている」)としての使用を各2問ずつ設定し、合計40問の四者択一のテストを作成した。まず、中国語を母語とする日本語学習者に実験を実施する直前、日本の東海地域にある大学で20名(男性:9名、女性:11名; $M=20$ 歳1カ月, $SD=7$ カ月)の日本人大学生にオノマトペのテストを実施した。その結果、平均正答率は99.75%であった。したがって、オノマトペテストの問題文と選択肢の妥当性が高いと考えられる。そして88名の中国語を母語とする日本語学習者にオノマトペのテストを実施し、擬音語と擬態語の副詞とスル動詞としての使用の理解を考察した。

また、日本語学習者の日本語の文法知識を測定するために、早川・玉岡(2015)の開発した調査・実験用の36問の文法テストを使用した。88名の日本語学習者にこの文法テストを実施したところ、クロンバックの信頼度係数は $\alpha=.80$ と高かった。文法テストの得点分布にしたがって、88名の日本語学習者を上位群($M=27.00$, $SD=2.75$, $n=25$ 名)、中位群($M=20.82$, $SD=2.02$, $n=33$ 名)、下位群($M=13.73$, $SD=2.80$, $n=30$ 名)の3群に分け、文法力がどのようにオノマトペの理解に影響するかを検討した。

3. データ分析

3-1. 対応のある2要因の分散分析によるスル動詞と副詞としての使用の得点の比較

テスト得点を従属変数とし、オノマトペのテストの正誤(正答は1、誤答は0)について対応のある2要因(オノマトペの擬音語と擬態語の2種類×オノマトペのスル動詞と副詞の2種類)の分散分析を行った。表1は分析結果である。

表1からわかるように、オノマトペの品詞性の主効果が有意であった[$F(1, 87)=77.26$, $p<.001$, $\eta_p^2=.47$]。オノマトペの全体得点からみると、副詞($M=5.88$, $SD=2.15$)のほうがスル動詞($M=4.45$, $SD=2.05$)よりも有意に得点が高かった。オノマトペのタイプの主効果は有意ではなく[$F(1, 87)=0.20$, ns , $\eta_p^2=.002$]、全体には擬音語と擬態語の得点に違いはなかった。また、2要因の相互作用が有意であったため[$F(1, 87)=22.59$, $p<.001$, $\eta_p^2=.21$]、単純主効果の検定を行なった。その結果、すべての水準間で有意差が見られた。擬音語の場合、副詞($M=6.30$, $SD=2.11$)がスル動詞($M=4.24$, $SD=1.77$)よりも有意に高かった[$F(1, 87)=71.54$, $p<.001$, $\eta_p^2=.45$]。擬態語も同様で、副詞($M=5.45$, $SD=2.11$)とスル動詞($M=4.91$, $SD=2.12$)に有意な違いが見られた[$F(1, 87)=8.44$, $p<.01$, $\eta_p^2=.09$]。また、オノマトペが副詞としての使用の場合は擬音語の得点が擬態語より有意に高かった[$F(1, 87)=8.44$, $p<.01$, $\eta_p^2=.09$]。それに対して、スル動詞としての使用の場合は擬態語の得点が擬音語より有意に高かった[$F(1, 87)=10.03$, $p<.01$, $\eta_p^2=.10$]。

表 1 対応のある 2 要因分散分析によるスル動詞と副詞としての使用の得点の比較

| | 副詞 | | スル動詞 | |
|---|----------|-----------|----------|-----------|
| | <i>M</i> | <i>SD</i> | <i>M</i> | <i>SD</i> |
| 擬音語 | 6.30 | 2.11 | 4.24 | 1.77 |
| 擬態語 | 5.45 | 2.11 | 4.91 | 2.12 |
| 分散分析の結果 | | | | |
| タイプの主効果： 擬音語＝擬態語 [$F(1, 87)=0.20, ns, \eta_p^2=.002$] | | | | |
| 品詞性の主効果： 副詞>スル動詞 [$F(1, 87)=77.26, p<.001, \eta_p^2=.47$] | | | | |
| タイプと品詞性の交互作用： [$F(1, 87)=8.44, p<.01, \eta_p^2=.09$]. | | | | |
| 単純主効果の結果 | | | | |
| 擬音語の品詞性： 副詞>スル動詞 [$F(1,87)=71.54, p<.001, \eta_p^2=.45$] | | | | |
| 擬態語の品詞性： 副詞>スル動詞 [$F(1,87)=8.44, p<.01, \eta_p^2=.09$] | | | | |
| 副詞： 擬音語>擬態語 [$F(1, 87)=8.44, p<.01, \eta_p^2=.09$] | | | | |
| スル動詞： 擬態語>擬音語 [$F(1, 87)=10.03, p<.01, \eta_p^2=.10$] | | | | |

3-2. 決定木分析によるオノマトペの意味理解に影響する要因の検討

オノマトペの品詞性，日本語学習者の文法力，オノマトペのタイプの 3 要因がどのようにオノマトペの習得に影響を及ぼすかを検討するために，オノマトペの正答率に貢献するオノマトペの品詞性（スル動詞，副詞），日本語学習者の文法力（上位群，中位群，下位群），オノマトペのタイプ（擬音語，擬態語）の 3 つを独立変数とし，オノマトペの正誤を従属変数として予測する決定木（回帰木）分析を行った。決定木分析の樹形図は図 1 に示した。

文法力がオノマトペの意味理解を予測する最も強い要因となった [$F(2, 3517)=5.53, p<.001$]。「上位群 ($M=63.7\%$, ノード 1) > 中位群 ($M=51.7\%$, ノード 2) > 下位群 ($M=42.1\%$, ノード 3)」の順でオノマトペの正答率が有意に高くなった。日本語学習者は文法力が高ければ高いほどオノマトペをよりよく習得したことが示された。次に，上位・中位・下位群の 3 群では，いずれもオノマトペの品詞性がオノマトペの正答率を予測した。上位群では，副詞としての使用 ($M=70.0\%$, ノード 4) の正答率がスル動詞 ($M=57.4\%$, ノード 5) よりも有意に高かった [$F(1, 998)=17.43, p<.001$]。さらに，上位群のスル動詞としての使用では，オノマトペのタイプの影響も見られた [$F(1, 498)=4.35, p<.05$]。擬態語 ($M=62.0\%$, ノード 10) のほうが擬音語 ($M=52.8\%$, ノード 11) より有意に正答率が高かった。中位群では，副詞としての使用 ($M=58.0\%$, ノード 6) の正答率がスル動詞 ($M=45.3\%$, ノード 7) としての使用よりも有意に高かった [$F(1, 1318)=21.73, p<.001$]。しかし，オノマトペのタイプの影響はなかった。下位群でも，副詞としての使用の正答率がスル動詞よりも有意に高かった [$F(1, 1198)=21.69, p<.001$]。それに，オノマトペが副詞として使用される場合はオノマトペのタイプの影響が見られた [$F(1, 598)=6.89, p<.01$]。上位群と異なり，下位群は擬音語 ($M=54.0\%$, ノード 12) の正答率が擬態語 ($M=43.4\%$, ノード 12) よりも有意に高かった。

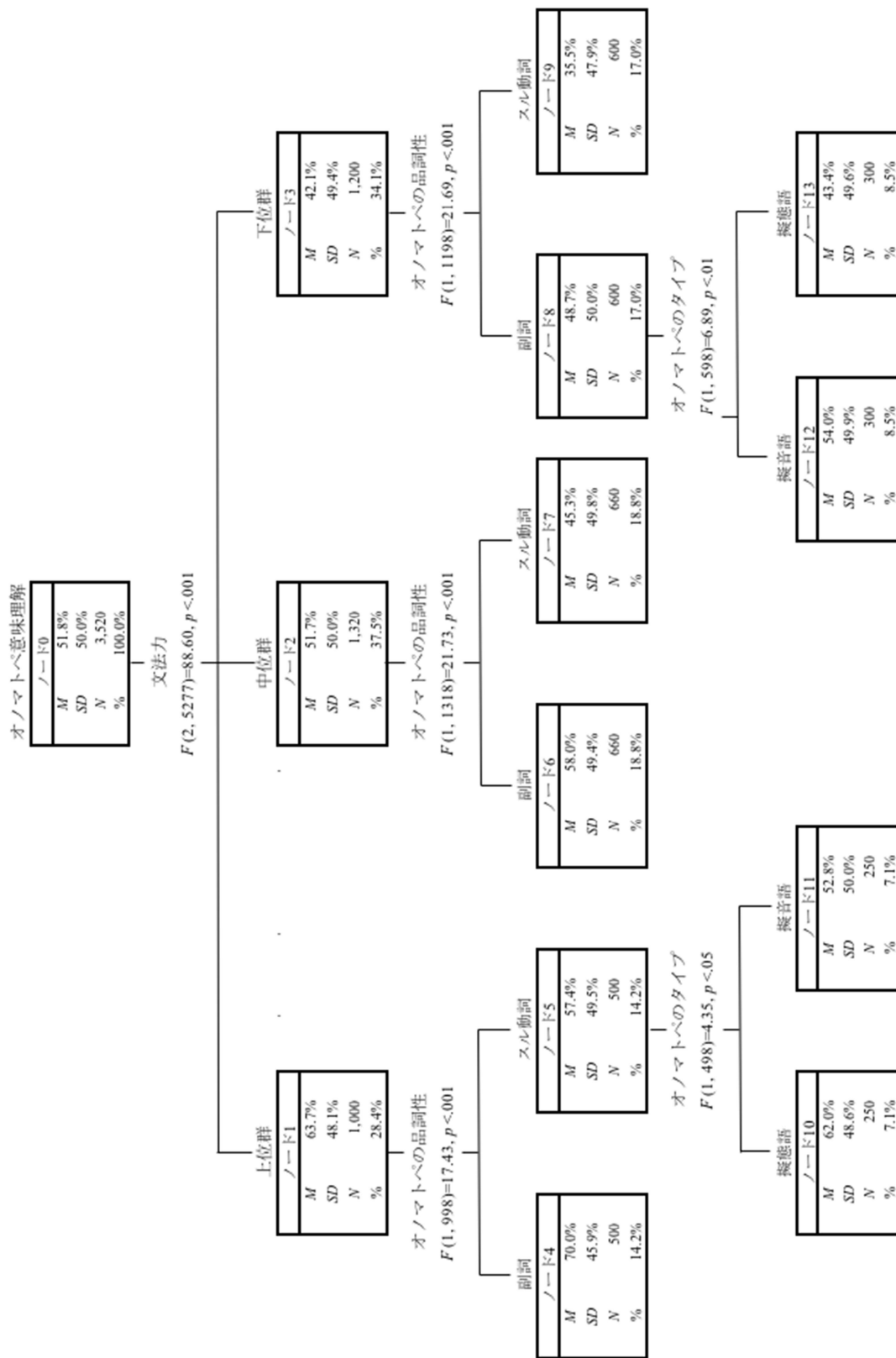


図1 決定木分析によるオノマトペの意味理解に影響する諸要因

以上のように、文法力の高低に関わらず、日本語学習者の 88 名全員がオノマトペのスル動詞としての使用に比べ、副詞としての使用のほうを正しく理解していた。上位群が擬音語よりも擬態語をよりよく習得していたのに対して、下位群が擬態語よりも擬音語をよりよく習得していたことが明らかになった。馮・玉岡 (2018a) では、日中音韻類似性の影響で擬音語の習得難易度が擬態語よりも低いので、中国語を母語とする日本語学習者は日本語母語話者と同様に、擬態語よりも擬音語を理解しやすい側面もあると報告している。これにより、第 2 言語習得の初級段階では、母語 (中国語) の正の転移は第 2 言語としての擬音語の習得を促進することが示唆される。日本語知識の増加とともに、母語の影響が弱くなりつつあり、上級段階では中国語を母語とする日本語学習者は日本語の知識を運用し、オノマトペを習得していると考えられる。そのため、上位群の日本語学習者は母語 (中国語) の知識を借用しなくても、母語に存在しない擬態語を一般語彙と見なしてよりよく習得している。

4. 結論と日本語教育への示唆

本研究では、中国語を母語とする日本語学習者の 88 名にオノマトペの意味理解課題を課し、第 2 言語としてのオノマトペの統語習得プロセスを明らかにした。対応のある 2 要因の分散分析の結果により、中国語を母語とする日本語学習者は日本語母語話者のように、同一オノマトペの副詞とスル動詞としての使用の両方を同程度に身につけていないことがわかった。日本語学習者のオノマトペの品詞習得のプロセスは日本語を母語とする幼児と異なり、第 1 言語習得におけるオノマトペの品詞転換過程が第 2 言語習得に存在しないことが実証された。統語範疇から見ると、中国語を母語とする日本語学習者は日本語を母語とする成人のオノマトペ使用と類似している。したがって、第 2 言語の言語環境からのインプットの影響で、中国語を母語とする日本語学習者が日本語を母語とする成人の文法システムを適用し、オノマトペの副詞としての使用をよりよく習得できると考えられる。

また、決定木分析の結果では、上位群・中位群・下位群の 3 群では、いずれもスル動詞としての使用の正答率が副詞より低かったことが示された。さらに、オノマトペ理解の 3 要因には、オノマトペのタイプ (意味) が文法力とオノマトペの品詞性 (統語) に比べて弱い要因となった。本研究では、四者択一の形式で唯一の正答を導きだすように設定しているので、もし日本語学習者がオノマトペその語彙の意味を完全に理解できれば、日本語を母語とする成人のように 4 つの選択肢から同一オノマトペの副詞としての使用またはスル動詞としての使用を正しく選ぶことができると思われる。これにより、日本語オノマトペの音象徴への感覚を養う幼児期のない日本語学習者は、一般動詞からオノマトペの意味を理解しようとするものの、オノマトペそのものの意味を完全に身につけていることはできないと考えられる。

したがって、日本語を母語とする幼児のオノマトペの自然獲得プロセスを参考にしてみれば、オノマトペを具体的な使用場面にマッピングし、日本語を第 2 言語として習得する日本語学習者にオノマトペそのものの意味を理解させるのは重要だと考えられる。単に「オノマトペ+動詞」のようなコロケーション形式でオノマトペを指導すれば、日本語学習者のオノマトペへの理解はあくまで表面形式にとどまるおそれがある。なお、本研究の研究

結果からわかるように、第2言語の日本語教育においてあまり重視されないオノマトペが日本語を第2言語として習得する日本語学習者にとって非常に難しいといえよう。ここで、日本語教育において、オノマトペの指導の重要性と必要性を改めて強調したい。

参考文献

- (1) 阿刀田稔子・星野和子 (1989). 「日本語教材としての音象徴語」『日本語教育』68, 30-44.
- (2) 金慕箴 (1989). 「中国における日本語の擬音語・擬態語の教育について」『日本語教育』68, 83-98.
- (3) 佐治伸郎・今井むつみ (2013). 「語意習得における類像性の効果の検討：親の発話と子どもの理解の観点から」篠原和子・宇野良子 (編) 『オノマトペ研究の射程 = Sound Symbolism and Mimetics : 近づく音と意味』(pp. 151-166). 東京：ひつじ書房.
- (4) 鈴木陽子 (2013). 「インタラクションのなかで使われる「オノマトペ+する」動詞：親子談話の分析から」篠原和子・宇野良子 (編) 『オノマトペ研究の射程 = Sound Symbolism and Mimetics : 近づく音と意味』(pp. 167-181). 東京：ひつじ書房.
- (5) 玉岡賀津雄 (2017). 「音象徴語と動詞の共起パターンに関する新聞コーパスの共起頻度と母語話者の産出との類似性の検討」『計量国語学』31(1), 20-35.
- (6) 早川杏子・玉岡賀津雄 (2015) 「改訂版・構造分類による日本語文法知識テストの開発—中国人日本語学習者のデータによるテスト評価—」『ことばの科学』29, 5-24.
- (7) 田守育啓・ローレンス スコウラップ (1999). 『オノマトペ：形態と意味』東京：くろしお出版.
- (8) 馮亜静・玉岡賀津雄 (2018 a). 「中国人日本語学習者による擬音語と擬態語の習得に影響する要因」『中国語話者のための日本語教育研究』9, 35-51.
- (9) 馮亜静・玉岡賀津雄 (2018 b). 「中国人日本語学習者の「触覚から触覚以外へ」の意味拡張によるオノマトペの習得の連続性に関する検討」『第二言語としての日本語の習得研究』21, 7-24.
- (10) Asano, M., Imai, M., Kita, S., Kitajo, K., Okada, H., & Thierry, G. (2015). Sound symbolism scaffolds language development in preverbal infants. *Cortex*, 63, 196-205.
- (11) Imai, M., Kita, S., Nagumo, M., & Okada, H. (2008). Sound symbolism facilitates early verb learning. *Cognition*, 109(1), 54-65.
- (12) Kakehi, H. (1983). Onomatopoeic Expressions in Japanese and English. *Proceedings of the XIIIth International Congress of Linguists*, 913-918.
- (13) Nagumo, M., Imai, M., Kita, S., Haryu, E., & Kajikawa, S. (2006). Sound iconicity bootstraps verb meaning acquisition. *XVth International Conference of Infant Studies*, Kyoto, Japan.
- (14) Toda, S., Fogel, A., & Kawai, M. (1990). Maternal speech to three-month-old infants in the United States and Japan. *Journal of Child Language*, 17, 279-294.